White and Black

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗｈｉｔｅ　ａｎｄ　Ｂｌａｃｋ

【Ｎコード】
Ｎ９０９８Ｓ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
カンサスのイングランド系の若者ロバートはカントリーロック歌手として大成する為にロスに出た。そのロスの店でアフリカ系の店員に教えられたこととは。アメリカの音楽は様々なジャンルがあり互いに影響し合っています。そこがアメリカのいいところなのでしょう。

第一章

Black　　White　and

ロバート＝スタッドマンは住んでいるカンサスを出てだ。ロサンゼルスに出た。理由は簡単でそこで成功して金持ちになる為だ。彼はカンサスを出る時にこう周囲に話した。

「まああれだよ」

「あれって？」

「何で成功するっていうんだ？」

「俺の歌でな」

実は彼はハイスクールの頃からカンサスで有名な歌い手だった。その評価はかなり高くロサンゼルスに出るのも実はスカウトされてのことなのだ。

「これで成功するからな」

「それで金持ちになるんだな」

「アメリカンドリームを実現するって訳だな」

「ああ、そうさ」

彼はその屈託のない明るい笑顔で答えた。ブラウンの髪に緑の目、それに彫のある顔に高い鼻。何処からどう見ても白人である。イングランド系である。

その彼がだ。同じく白人である友人達に話すのだった。

「そうするからな」

「ロスなあ」

「結構色々な人間がいるらしいよな」

友人達はそのロスの話もはじめた。

「何かあれだろ？アジア系もいて」

「アフリカ系もいるよな」

「ヒスパニックもな」

「それでそうした系列の音楽もあるよな」
彼等のその音楽の話にもなる。アメリカは多くの民族で構成されているだけあって様々な音楽が存在している。ロバートのやっているその音楽の話になっていったのだ。
「御前がやってるカントリーロックだけじゃなくてな」
「他にもな」
「ははは、そういうのには負けないさ」
ロバートは笑ってそのうえで負けん気を出した。
「俺のカントリーロックはな。そうした音楽にもな」
「勝てるっていうんだな」
「それにも」
「ああ、勝ってやるさ」
友人達に笑顔でこう言うのであった。
「それでな。金持ちになってやるさ」
「ああ、それじゃあな」
「頑張れよ」
こうして彼はカンサスを出てロサンゼルスでの活動をはじめた。最初から幸運なことにＣＤがそこそこ売れ順調に進んでいた。ところがだ。
彼はだ。カントリーロックだけではないことをだ。ロスで知ったのだった。
店に行けばだ。そこには。
ロックもある。彼のジャンルのカントリーロックもだ。しかしだ。
それ以上にだ。他のものが多かった。
ポップスがある。ジャズにゴスペルにラップにだ。とにかく様々な音楽がある。アメリカそのものと言っていい状況になっていた。
しかしそれを見てだ。彼は言うのであった。そのＣＤ達のジャケットを見てだ。
「何かな」
「アフリカ系ばかりだっていうのかい？」

店の者がここで出て来て声をかけてきた。アフロの痩せたアフリカ系の青年だった。店の中は赤や青や黄色でかなり派手だ。店の内装もそうだがそれ以上にＣＤのジャケットの色が目立った。目がちかちかせんばかりの極彩色の店の中にいる店員はだ。ジーンズにシャツというラフな格好だ。しかし赤いシャツがやけに目立つ。店員自身もピアスにブレスレットにとだ。極彩色の店の中に負けない格好である。

その店員がだ。彼に声をかけてきたのである。こう。

「この店にあるのは」

「いや、それは」

「まあジャズとかラップが人気あるからな」

店員は特に悪い顔をするでもなく彼に言ってきた。

「そういうのはな」

「アフリカ系の音楽か」

「伝統的にそうだろ」

「そうだよな。どっちもな」

「それでだよ。他の音楽だってな」

そのロックやポップスもである」

「多いよな、どうしても」

「アフリカ系がな」

「アメリカの音楽界ってそうなってるからな」

スポーツの世界もそうだが音楽もだ。アメリカのそうした世界はアフリカ系が多い。これについては身体能力や音楽センスが影響していると言われている。

「あんた別に人種差別とかはないよな」

「人種差別？」

「いるからな、どうしても」

店員はここでは真面目な顔になっていた。

第二章

「そういう奴じゃないな」
「別にな。肌の色なんてどうでもいいだろ」
ロバートも真面目な顔で答える。
「それで歌が上手くなるのか？肌が白いとか黒いだけで」
「それならいいさ」
店員も彼の言葉を聞いて納得した顔で述べた。
「ここでニガーとか言ったらな」
アフリカ系への蔑称である。日本語に訳すと黒んぼとなるだろうか。
「店から追い出してるところだ」
「おいおい、厳しいな」
「そういうあんただって白んぼとか言われたら怒るだろ」
「ああ、ぶん殴る」
真面目な顔で答えるロバートだった。
「相手が誰でもな」
「そういうことだよ。だからな」
「そういうことか」
「こう言えばわかるな」
「よくな」
そのアフリカ系の店員に応えてからだ。彼はあらためて言うのであった。
「しかし。本当に多いな」
「だから人気があるからだよ」
「人気か」
「どうしてもアフリカ系のが多いな」
店員はここでもこうロバートに話す。
「まあそういうことだ」

「それでお勧めの曲は何だ？」
「ジャンルは何だい？」
「カントリーロックな」
自分がそれを歌う歌手とは答えない。しかしそれでも問うのだった。
「それな」
「カントリーロックか」
「ああ。あるよな」
「あるぜ」
店員は気さくな笑顔になってロバートに答えた。そうしてだった。
すぐにだ。一枚のＣＤを出してきた。それは。
ＣＤのジャケットは落ち着いたものだった。だがそこにいるのは。
「こいつは」
「アルバート＝ヒューイックか」
「それがそいつの名前か」
「ああ、そうだよ」
そこにいたのもアフリカ系だった。何処かデンゼル＝ワシントンに似た男が湖のほとりで佇んでいる。そうしたジャケットだった。
それを見てだ。店員は言うのだった。
「いいぜ、この歌手は」
「カントリーロックもなんだな」
ロバートは考える顔でこう述べた。
「やっぱり」
「アフリカ系か」
「歌うんだな」
「どのジャンルでもいるな」
店員も実際そうだというのである。
「クラシックでもそうだしな」
「キャスリーン＝バトルにジェシー＝ノーマンか」
どちらもオペラ歌手である。ソプラノである。

「あの二人とかだな」
「まあバトルはな」
店員はバトルについては困った笑顔になって述べた。
「今はな」
「メトに出られないからな」
「問題起こしてな」
このことは二人共知っているのだった。
「それでだからな」
「あれはバトルが悪いな」
「やっぱりな。まあとにかくな」
「我が国の音楽はか」
「ああ、アフリカ系が多いからな」
そこに行き着く。やはりだ。
「カントリーロックでもな」
「そうなんだな」
「そうだよ。それでこれ買うかい？」
店員はそのＣＤを見せ続けながら問うた。

第三章

「どうするんだい？それで」
「ああ、そうさせてもらうよ」
ロバートは微笑んで答えた。
「それじゃあな」
「毎度あり」
店員はその言葉に笑顔で応えた。そうしてこうも言ってきた。
「他にも買うかい？」
「そう来るか」
「ここはアメリカだぜ。当然だろ」
冗談めかした笑みでの言葉だった。
「それでどうするんだよ」
「そうだな。それじゃあな」
勉強の意味もある。彼も決めたのだった。
「買わせてもらうか」
「ああ、それじゃあな」
店員は他にもカントリーロックのＣＤを勧めてきた。だがその殆どがアフリカ系のものだった。彼と同じ欧州系の歌手は僅かであった。
そして聴いてみるとだ。これが。
「いいな」
よかったのである。そのアフリカ系の歌手達がだ。それでだ。
それから彼は熱心にＣＤを集めてだ。聴いていった。それで店員とも話した。
「いいってか」
「ああ、いいな」
実際にそうだと答えるロバートだった。
「どの歌手もな」

「そうだろ。俺が勧めるんだからな」
「あんたが勧めるからいいってのか」
「俺は実際に聴いていい曲を勧めるんだよ」
彼は笑顔でロバートにこう話した。
「それが俺の主義なんだよ」
「そうだったのか」
「ああ。それでな」
ここまで話してだ。店員は彼の顔を見て言ってきた。
「あんたも歌手だろ」
「知ってるのか」
「ロバート＝スタッドマンだったな」
彼の名前をそのまま言ってきた。
「昨日あんたのＣＤがうちの店にも入ったぜ」
「そうか。この店にもか」
「それで聴かせてもらった」
笑顔で述べる店員だった。
「あれだな。いい感じだな」
「客に勧められるレベルか？」
「まあそうだな」
それはいけるという店員だった。ところがだ。
彼はだ。本人に対してこうも言った。
「勧められるけれどな」
「けれどかよ」
「Ａ級じゃないな」
特別いいかというとそうではないというのだ。
「まあそこそこ勧められるってレベルだな」
「一流じゃないっていうんだな」
「もう少し足りないんだよ」
店員は正直に述べた。
「あんたの音楽はな」

「もう少しか」
「ああ、演奏はあんた自身がしてるな」
「そうさ。ギターでな」
彼は演奏も自分でしている。それが彼のやり方だ。
「ちゃんとしてるけれどな」
「それがな。今一つなんだよ」
「ギターがか」
「あんたの歌はいい」
完人要のそれはだというのだ。
「けれどな。ギターがな」
「駄目か」
「駄目ってとこまではいかないさ」
そこまではというのだ。

第四章

「けれど。今一つなんだよ」
「そうか、そういう意味か」
「あれだ。もうちょっと練習したらいい」
「それでいいのか？」
「他のカントリーロックの歌手を聴きながらだ」
話は少し具体的なものになってきた。
「そうしたらいいさ」
「あれか。またアフリカ系のをメインにか」
「そうだ。カントリーロックもアフリカ系が多いからな」
「それでなんだな」
「あんたがレイシストならそんなことは言わないさ」
それはないというのである。
「けれどあんたはそうした偏見はないからな」
「だから音楽に人種とか関係ないだろ」
この考えは変わらない。ロバートの美点でもある。
「そうだろ？やっぱり」
「そうさ。何度も言うが俺はな」
「そういう奴にはだよな」
「ＣＤも紹介しないし売らないし話もしない」
話は三連続であった。
「絶対にな」
「だから俺にもか」
「それでだ。何か違うだろ」
店員は話を音楽に戻してきた。
「アフリカ系の演奏もな。歌手によるけれどな」
「そうだな。何かな」
「具体的に言うと他の音楽が入ってるな」

「ああ、そうだな」
その通りだった。ロバートもそのことはもう感じ取っていた。
「何かな」
「それだよ。カントリーロックに他の音楽も入れてるんだよ」
「それを演奏に出してるんだな」
「そうさ。具体的にはそうさ」
「他の音楽か」
「ジャズにしてもロックにしてもな。入れてるからな」
そうした音楽のものをだ。アフリカ系の歌手達は入れているというのだ。
「それを演奏に入れてるんだ」
「音楽にはじゃなくてか」
「あんたは音楽もいい」
作曲という意味である。
「歌詞はまあ普通レベルだけれどな。とりあえずそれは置いておいてな」
「要は演奏か」
「そうさ。あんたはそれだ」
「演奏がどうかか」
「練習しながら聴いてみるんだな」
店員は二つのアドバイスを合わせて一つにして述べた。
「そうしたらいいさ」
「わかった。じゃあな」
こうしてだった。彼はまたＣＤを買ってそうしてそれを聴いてそのうえで練習をしてみる。するとその中でだ。感性でわかったのだ。
「ああ、そうか」
ギターを演奏しながら述べた。自分の部屋の中でだ。
下手の中にはステレオがある。そこにＣＤを入れているのだ。その他にはテレビとベッドがあるだけだ。質素といえば質素な部屋である。

その中でベッドの上に座ってだ。彼は今わかったのだった。
「ここをこうしてだな」
演奏の中で呟く。
「こうしたらいいんだな」
指を動かしてだ。それを確かめるのであった。
そうしたことをやっていってだ。それでだった。
ライブの時、小さな会場でそれをやってみた。するとだ。
既に彼を知っている観客がだ。まず言った。
「あれっ、変わった？」
「ああ、変わったな」
「いい感じになったら」
「一層な」
これが彼等の感想であった。
「これまでストレートだったのにな」
「それが変化球も入ったな」
「ああ、そんな感じだな」
こう話をしていく。

第五章

「余計によくなってるな」
「アフリカ系の音楽が入ったか？」
「演奏の感じにな」
曲は同じでもだ。そこがなのだった。
こうしてだ。彼の演奏はよくなり彼の人気は確かなものになったのだった。
ＣＤも売れていきだ。何時しかメジャーになった。しかしそれでもだ。
あのアフリカ系のアフロの店員がいる店に行きだ。そうして彼の話を聞くのであった。
「何だよ、あんたまだ来るのかよ」
「来て悪いか？」
「そうは言ってないだろ」
店員はロバートに微笑んで言葉を返すのだった。
「言ってるだろ。俺はいい客ならウェルカムなんだよ」
「つまり俺はいい客なんだな」
「音楽を理解する意味でもＣＤを買う意味でもな」
どちらでもだというのだ。
「いい客だよ」
「そうか。それは何よりだな」
「それでだよ。あんたのＣＤな」
「ああ、売れてるか？」
「この店でも人気だよ」
まさにそうだというのである。
「専用のコーナーもできてるさ」
「へえ、そこまでかい」
「アフリカ系の客にも売れてるぜ」

そのアフリカ系の話がここでも出た。
「かなりな」
「アフリカ系にもか」
「ああ。勿論ヨーロッパ系にもな」
そちらにもだというのだ。売れているというのである。
「アジア系にも売れてるしヒスパニックにもな」
「結局誰にも売れてるのかよ」
「そうさ。いい話だろ」
「ああ。俺もCDが売れないと食っていけないからな」
この辺りは現実である。結局CDが売れてコンサートに客が入らないと話にならないのだ。それが歌手の現実である。シビアな世界でもあるのだ。
「それは何よりだよ」
「ただな。そうなったのはな」
店員の話がここで変わった。
「あんたの演奏が変わったからだよ」
「それでか」
「ああ、演奏が変わったからな」
まさにそれでというのである。
「それでそうなったんだよ」
「そうか。やっぱりあんたの話を聞いてよかったな」
「俺のアドバイスは正解だったってことだな」
「そうなるな。あんたあのままだったらな」
「ここまでなってないか」
「ああ、なってないからな」
それは確かだというのだ。店員もだ。
「まあそこそこのままだったな」
「今みたいにメジャーになってないか」
「音楽を聴くのはヨーロッパ系だけじゃないんだ」
アメリカが他民族、多人種国家である限り絶対のことである。

「アフリカ系もアジア系もいるからな」
「それでヒスパニックもだよな」
「その数だけの音楽があるからな」
「カントリーロックっていってもだな」
「ああ、アフリカ系もあるんだ」
何といってもだ。音楽では彼等が大きいのだった。
「それを取り入れない手はないだろ」
「全くだな。それがよくわかったよ」
ロバートも確かな顔で述べる。
「それがな。カントリーロックもヨーロッパ系だけじゃ駄目か」
「ああ、アフリカ系もあってだよ」
そしてだ。店員はこうも言った。
「あんたも全部白じゃ物足りないだろ」
「確かにな」
色の話だが音楽の話であった。ロバートもそれを踏まえて笑顔で応える。
「それだけじゃな」
「そういうことだよ。黒もあってだよ」
「よくなるんだな」
「黄色も赤もあっていいさ」
店員はさらに言う。
「そういうことなんだよ。つまりはな」
「そうだよな。じゃあ俺はこれからもな」
「その演奏に取り入れていくんだな」
「そうするさ。これからもな」
笑顔でだ。店員に述べるロバートだった。彼はカンサスの優れたカントリーロック歌手からアメリカを代表するカントリーロック歌手になった。それにはこうした経緯があった。彼だけの音楽だけではそこまでなれなかった。そこに別のものが加わってだ。そこまでなったのである。そうした話である。

White and Black

完

2011・1・30

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9098s/

Ｗｈｉｔｅ　ａｎｄ　Ｂｌａｃｋ

2011年5月1日22時56分発行